びぶりおてか

同志社大学図書館報 No.7. 1970.7.1

雑　　感

原　　正
図書館長

京都の落ち着いた佇まいに憧れて上洛したのは，ちょうど敗戦の翌年であった。

月日の経つのは早いもので，あれから既に25年になろうとしている。そして敗戦当時には全く想像も出来なかったような，華々しい高度経済成長〔少なくとも見かけ上〕をとげている。しかし，その反面，我々の周囲では公害など生命そのものさえも脅かすような，ゆゆしい問題も発生している。これは京都といえども例外ではなく，日毎に昔の佇まいが失なわれ，また生活環境が損なわれて行くのは，本当に残念なことである。

さて，懐旧談になるが，昭和21年といえば敗戦の虚脱状態から僅かながら復興への動きが芽生えつつあったものの，食糧不足やインフレなどの悪条件下で，多くの人々は，その日の生活に追い廻されていたように思う。京大にも食堂という名のところはあったけれども，米穀統制令下の当時としては名ばかりで，１日のうち１度，僅かの米雑炊などにありつければ良い方であり，残りの２食は外食券を持って行っても馬鈴薯またはコッペパンと味噌汁程度で，量的にも乏しく，ひもじさは到底避けられなかった。時々郷里まで補給をかねて帰ろうとすると，汽車のキップを入手するのが，これまた大変で，朝は４時起きをして駅までの１時間余を歩き，長時間寒い中を待たされて漸く入手できる始末であった。いざ乗車となっても混雑のため入口からは，まともに乗れず止むをえず窓から出入りするような状態で，現在の学生諸君がレジャーのために長時間並ぶのとでは，およそ似而非者であった。また，当時の娯楽といえば，映画ぐらいのものであったが，私はよく友人と地図を頼りに好きな山歩きを楽しんだ。時には道に迷いつつ京都の北山を越えて小浜まで歩いたことがあるし，遠くは九州阿蘇あたりまで米と乏しい旅費だけで足を伸ばしたこともある。今から考えると，余り誘惑がなかったから却って学問に打ち込めたのかもしれない。物質的には，今よりも遙かに苦しい時代であったけれども，当時の学生は，それほどアルバイトはしていなかったように思う。その功罪は別として，戦争中の空白をとりもどそうという意欲にもえていたことと，アルバイトに対する見解が今とはかなり違っていたことのためと思われる。

全くお話にならない時代であったけれども，学生生活は現在よりも却って充実していたような気がする。友人とは暇をつくってはディスカッションをしたし，自分でもよく勉強した。しかし何よりも困ったことは，当時，書籍の乏しかったことである。私の専門的な文献は勿論，古本屋とは無縁であったが，日曜日ともなれば精神的な糧を求めて，大抵半日ぐらいは古本屋をあさったものである。出町から銀閣寺にかけての界隈，あるいは河原町丸太町から熊野神社あたりにかけて，よく歩いたものである。最近は，そのような古本屋には疎遠となったが，今はどんなになっているだろう。一度暇をみて歩いてみたいものである。

昭和23年3月，京都大学では中央図書館ができた。キャンパスの中で，どちらを見ても，くたびれた感じの建物ばかり並んでいた当時としては，本当に目を見張らせるようなものであった。その後，京大では昭和30年代の後半にかけて建築ラッシュが続き，老朽建物は一掃されたのであるが，この建築ラッシュに先立つこと10余年，真先に中央図書館が新築されたことは，学問の府に相応わしい出来事であったように思う。

ひるがえって，同志社の場合はどうであろう。すでに10年も前から新図書館の建築が問題とされながら，今もって着手の段階に至っていないのは誠に残念である。京都市内に限ってみただけでも，立命や大谷の各大学では既に立派な図書館が完成しており，竜谷大学でも近く中央図書館の建築に着手するように伺っている。国公立大学では学生数の20%，私立では10%の閲覧席数が最少限確保されなければならない今日，同志社の現状は余りにもお粗末である。1日も早く新図書館を完成して学問をするための快適な場を設けたいと願うものである。

さて，話はとぶが，昭和33年9月から1年間ミネソタ大学に留学した時のことである。私は後年，図書館関係の役職につくなど夢にも思っていなかったので，ミネソタ大学の中央図書館については余り詳しく調べなかったし，またシカゴ，イリノイ，ウィスコンシン，ワシントン，ハーバード，エール，バージニヤ，カリフォルニアの各大学の研究室も訪れたのに，やはり図書館は見落して来てしまった。今にして思うと悔やまれてならない。科学の研究でも，よくぶつかることだが，思わぬときに思わぬ知識が役立つことがある。これは，その失敗の良い教訓である。

私の専攻は化学で，ミネソタ大学ではリサーチ・フェローとして研究のみに従事していたので，文献は化学の図書館に行けば，事足りた。そこでは自分の研究室，図書室，エレベーターなどの鍵はすべて貸与されていたので，文献が必要な時は，いつでも自由に見ることができた。大学院学生は，概ね同じように処遇されていたように記憶している。化学ライブラリーには，概ね夜の8時までは係員が1名いたが，それ以後引き続いて図書室を利用するときは，後の戸締りに責任のある程度であった。研究用図書室が四六時中，研究者に開放されていることは理想であり，またかくあらねばならないが，同志社でも事情の許す限り，そのようにありたいものだと思った。

留学先の中央図書館について今も印象に残っていることを二・三述べてみたい。当時何を調べる目的で中央図書館へ行ったのか今は，判然と覚えていないが，受付の若い女子が大変親切に応対してくれて，希望の本を直ぐ持って来てくれたことである。同じ大学でも化学系の事務員などは全く事務的に応対していたのに，図書館だけは違っていた。そこのレファレンサーには，本当に人間としての温かみが感じられた。私は社交的でなく，またアメリカ人の中に余り溶け込めるタイプでもなかったので，アメリカでの生活はむしろ殺風景なものであったが，あの図書館では本当に心あたたまる思いがした。化学ライブラリーにも年の頃は50ぐらいと見える女子ライブラリアンがいたが，本当に親切に応対してくれた。その人の名は忘れてしまったが，今でも当時のことが目に浮んでくる。

それから，学生が実によく図書館を利用しているのには感心した。教室における講義内容と図書館サービスとの間に密接な連絡がとれていて，学生は，講義，レポート，試験に関連して図書館をフルに利用しているように見えた。日本人は個人で本を所有し，1人静かに読むという傾向があるが，アメリカの大学生は共有物としての図書館をフルに利用していこうとしているようであった。ただ，その為に利用度の高い本は30冊ないし50冊も同じものを揃えているように聞いた。アメリカ人の合理的な考え方に，なるほどと感心したものであった。

同志社の図書館でも，このようなことが真剣に検討されているが，財源の問題は別としても，教学方針と図書館のあり方の関係を確立することが何よりも大切であろうと考えている。図書館のあり方が教学のあり方を決めるのではなく，教学のあり方が決って，それに図書館が如何に適応していくかが問題であろう。

しかし，現状をあるがままに受けとめてしまう常識的（理性的）な考え方では進歩は望めない。ジョージ・バーナード・ショーも「総ての進歩は非理性的人間によって，なしとげられる」と云っている。時として図書館の事情で，いろいろな制約の出てくることも当然であるので，常に両者間には密接な連繋がとれていなければならないだろう。幸い，前年度に同志社大学図書運営協議会内規がつくられたので，今後，学部，研究室，研究所などの意見を汲みながら，改善の方向に進みたいと思っている。

日頃考えていることや図書に関する思い出など，思いつくままに書き綴ったので皆様からの御叱正をいただければ幸いである。

文献探索 ——二次文献の利用—— (7)

日本史文献の解題・書目・索引について

一口に日本史関係の文献目録といっても随分広範囲にわたりますが，ここでは一応部門史，地方史等に関するものは省略し，主として本館所蔵の一般的な日本史文献解題・書目・索引等を紹介します。

I．解　題　書

1．**群書一覧**　1—6巻　尾崎雅嘉　享和2？
（㊐015.1；O）
著者が30年の間に見聞した和書を33部門に分け解題。解題書としては最初のもので注目すべき労作。これを補うものとして西村兼文「**増補続群書一覧**」大正15（㊐015.1；N2），尾崎雅嘉著 入田整三補「**参照群書一覧**」昭6（㊐015.1；O—1a）がある。

2．**群書備考**　村井量令　国書刊行会　大正5　540頁
（㊐015.1；M3）

3．増訂改版**国書解題**　上下　佐村八郎　六合館　大正15
（㊐015.1；S2—1a）
上古以来慶応3年までの典籍約2万5千部の解題。著作者の略伝，著者索引，分類索引，字画索引を付す。

4．**史学名著解題**　千代田謙等　共立社　昭6　137,149,75頁（現代史大系15）（㊐908；G）

5．更訂**国史の研究**　1—3　黒板勝美　岩波　昭6—11
（㊐910；K—1a）
純然たる解題書ではないが，昭5年までに公にされた国史書を解題。総説篇中に明治初年～昭和5年までの国史研究書の文献目録（155～325頁）を収録。

6．**異説日本史　第18巻　文献史料篇**　雄山閣　昭8
359頁　（㊐910.8；Y）

7．**綜合国史研究**　1—3　栗田元次　同文社　昭10—11
（㊐016.91；K）
明治以降昭和9年までの国史研究書，参考図書を類別して解題。中巻の雑載の項で論文集，雑誌の解題をし，下巻では史料の解題と書名索引，著者名索引を収録。

8．**国史東洋史西洋史史籍解題**　遠藤元男等　平凡社
昭11　250，283，193，82，93，8頁（㊐016.9；E）
「**世界歴史大系 25 史籍解題**」（㊐908；S3—1a）を単行書として発行。書誌学的な，一般解題書的な解題をさけ史学史的な解題に重点。収録項目約3000，巻末に書名索引。

9．増訂**日本史学史**　清原貞雄　中文館書店　昭19　342，24頁（㊐901；K7—1a 文化研）
日本書記から明治時代までの歴史書解題を目的とす。

10．増訂**教養文献解説　下**　河合栄治郎　社会思想研究会
昭25　401頁（㊐016；K4）

11．**図書寮典籍解題　歴史編（正続）**　養徳社　昭25—26
（㊔029.3；K—2）
図書寮の蔵本中国史関係図書典籍の一部を正編—撰史記録，古文書，系図の四項に，続編—法利，朝儀，官職補任，部類記，陵墓の六項に分類し解題を付す。

12．**Japanese hisfory ; a guide to Japanese reference and research material.** John W. Hall
Univ of Michigan Press　1954　165P
（㊐016.91；H）
日本語を読み得る欧米人用に日本史参考文献を解題したもの。昭和25年までの文献1551点を収録。

13．**日本史料集成**　平凡社　昭31　601，49頁
（㊐910.8；H5 商研，文化研）
「**世界歴史辞典 22　史料編　日本**」（㊐903；H2）を単行書として発行。古代，中世，近世，近代の四篇に大別。それぞれを第1部史料解説，第2部史料篇に編集。

14．**経済史年鑑**　複刊　第1—3冊　日本経済史研究会
日本評論新社　昭30—31（㊔028.332；K）
収録期間；第1冊昭和26—28，第2冊昭和29，第3冊昭和30。総説，**日本歴史，日本経済史**，東洋経済史，西洋経済史の五部に分け解題。巻末に誌名一覧，書名一覧を付す。

15．**経済史文献**　昭和32—33年版（2冊）（㊔028.332；K2）
14の改題。編集方法，版次を継承。

16．**日本経済史文献解題**　昭和34—44年版（11冊）
（㊔028.332；K3）
15の改題。編集方法，版次を継承。

17．**日本経済史（第1—6）文献**　（6冊）本庄栄治郎
日本評論社　大阪経済大学日本経済研究所　昭30—44（㊔028.332；H2）
収録期間：

第一	昭和6年末まで	第四	昭和26～32年
第二	昭和7～15年	第五	昭和33～37年
第三	昭和16～25年	第六	昭和38～42年

総覧，**日本歴史，日本経済史**，欧文文献の四部に分け解題。巻末に地方誌文献，諸団体史一覧，誌名一覧，書名索付を付す。

18．**上代史籍の研究**　第1—2集　岩橋小弥太　吉川弘文館　昭31—33（㊐901；I7）

19．**国史文献解説**　正続　遠藤元男・下村冨士男　朝倉書店　昭32—40（㊔028.21；E）
「びぶりおてか」No.4 参照。

20．**日本古典の成立研究**　平田俊春　日本書院　昭34
1148，33頁（㊐016,912；H）

21．改訂増補**史籍集覧　第43巻　解題　書名索引**　角田文衛・五来重　臨川書店　昭34　100頁（㊔210.088；S5）
史籍集覧に収録された520余の史籍の解題。

22．**群書解題**　第1—22巻（30冊）群書類従完成会　昭36—42（㊔025.1；G）
正続群書類従に収録された全文献約3,500点の解題。

23．**日本古代史の基礎的研究　上　文献編**　坂本太郎
東大出版会　昭39　526頁（㊔210.3；S）

24．**歴史の名著　＜日本人篇＞**　歴史科学協議会　校倉書房　昭45　246頁（整理中）
現代史家の手になる名著25篇の解題。

Ⅱ．文　献　目　録

1．**綜合国史論文要目**　大塚史学会　刀江書院　昭14　627頁　（㊢016.91；O2）

明治初年～昭和13年4月までの史学関係雑誌ならびに論文集に発表された論文目録。やや古いが単一論文目録としては質量とも最も充実。

2．**史学文献目録　1946—1950**　史学会　山川出版社　昭26　204頁（㊢016.9；S）

終戦直後5年間の史学関係の論文と単行書の目録。巻末に著者索引を付す。

3．**東京大学史料編纂所図書目録**　2冊　昭30—36　（㊢017.77；T—11）

第一部　和漢書刊本編　2　歴史
第二部　和漢書写本編　2　史料（古文書）

4．**文学・哲学・史学文献目録Ⅷ　古代史編**　日本学術会議　昭34　122頁（㊞028；N）

昭和21—32年までを収録。

5．**文科系文献目録XIV　日本近代史（伝記編）**　日本学術会議　昭和38　95頁（㊞028；N—2）

昭和10年—36年の間に日本で発行された近代日本関係の人物の伝記類の目録。

6．**国書総目録**　1—　岩波書店　昭38—　（㊞025.1；K）

国初から慶応3年までに日本人の著編撰訳した書籍を収録。全国の主要な公私立図書館，各大学付属図書館を中心に各地の文庫などから広く採録。わが国文献目録史上の画期的な現在書目録。

7．**日本史学関係文献目録**　武田矩直　（日本思想史研究会「**日本における歴史史想の展開**」吉川弘文館　昭40所収　407～458頁）（㊢901；N9　㊞201.2；N）

その他**最新の文献**を探すには，雑誌「**日本歴史**」に「**歴史研究文献要目**」を，「**歴史教育**」に「**日本史関係雑誌論文目録**」をそれぞれ毎号収録しているのが役立つ。また次項の「**雑誌記事索引**」も重要な手がかりを提供してくれる。

Ⅲ．索　　引

1．**群書索引　1—3**　物集高見　広文庫刊行会　大正11　（㊢039；M2）

2．**増訂版日本随筆索引　正続**　太田為三郎　昭7—8　（㊢049；O-2）

約400種，2,000巻にものぼる書の標目索引。

3．**叢書採輯日本古典書目索引**　アチック　ミューゼアム　昭13　205，33頁（㊢015.1；A）

岩波文庫を始め代表的な叢書63種の中に採輯されている各種の古典を書名から所在検索し得る様にした索引。

4．**雑誌記事索引**　人文科学編　1—　国立国会図書館　昭23—　（㊞PO27；Z）

5．**増訂綜合史料索引**　渡辺茂　小宮山書店　昭34　606頁（㊢039；W）

「びぶりおてか」　No.4　参照。

6．**新版日本叢書索引**　広瀬敏　名著刊行会　昭44　92，9，761，96頁（㊞027.4；H）

初版の写本目録を復活編集。昭和31年までに出版された全集叢書類830種（本書にいう叢書とは群書類従，史籍集覧など古典 —記紀以下明治初年頃までの著述— を数種以上類従または収載したもの）を収録。収録叢書の解題もあり便。「びぶりおてか」No.4参照。

7．**六国史索引**　1—4　六国史索引編集部　吉川弘文館　昭38—44（㊞210.08；R）

Ⅳ．研究成果の紹介

1．**昭和〔　〕年の国史学界**　（昭5—11，15—18年）　16冊　代々木会　筑波研究部　昭6-20（㊢015.1；T5）

2．**明治以後に於ける歴史学の発達**　歴史教育研究会　昭7　680頁（「歴史教育」第7巻 第9号）（㊢901；R2—1a　文化研）

3．**歴史学の成果と課題　—歴史学年報—**　Ⅰ-Ⅵ　岩波　昭25—30（「歴史学研究」の別冊）（㊢905；R—2）

歴史学界の年間の研究成果，動向をまとめ文献目録を付す。Ⅶ—Ⅸは別冊形式を採らず「**歴史学研究**」（青木書店）に収録，以後中止。問題意識による選択が特色。

4．**日本史研究入門**　Ⅰ—Ⅲ　遠山茂樹・佐藤進一　東大出版会　昭29—44　（再整理中）

Ⅰは戦前から昭和29年まで，Ⅱは昭和30～35年，Ⅲ（井上光貞・永原慶二編）は昭和36—41年の学界の研究成果動向を紹介。巻末に文献目録を付す。

5．**日本に於ける歴史学の発達と現状　—日本史・東洋史・西洋史—**　Ⅰ—Ⅲ　国際歴史学会議日本国内委員会　東大出版会　昭34—44（㊞201.2；K）

日本歴史学界の研究成果をまとめ国際歴史学会議へ提出した報告書の邦訳。Ⅰは戦後から昭和32年，Ⅱは昭和32～37年，Ⅲは昭和38～42年までの研究水準をしめす文献を網羅的に挙げ便。

6．**岩波講座日本歴史　1—23**　家永三郎等　岩波　昭37—39（㊢910.8；I5—1b　㊞210.08；I）

古代，中世，近世，近代，現代の各時代編の最終巻に研究解題があり基本文献を知るに便。

7．**日本史学入門**　大久保利謙・海老沢有道　広文社　昭40（㊞210.01；O）

8．**日本史研究序説**　林屋辰三郎　創元社　昭40　297頁（㊞210.07；H）

その他「**史学雑誌**」が年間の研究成果を時代項目ごとに整理した年報「**1950年の歴史学界—回顧と展望**」（60編5号）以来毎年第5号をこれにあてている。また「**日本歴史**」200号（40年1月）に「**日本史の問題点**」を，「**日本史研究**」81号(40年11月)に「**戦後20年と今後の課題**」を，「**歴史評論**」200号（42年4月）に「**戦後歴史学の成果と問題点**」をそれぞれの立場から総括した特集を掲載。

Ⅴ．幕末・明治維新目録

1．**維新史研究史料索引**　日本歴史地理学会　大正8　220頁（本館ナシ）

明治30年から大正3年までの雑誌30種から選んだ記事の目録。

2．**明治維新史研究**　歴史学会　富山房　昭5　852頁　（㊢917.1；S—1a　神研，商研）

巻末に「**明治維新研究に関する日本文献**」（795～820頁）と「**幕末維新史関係西籍略目**」（821～852頁）を付す。

3．**維新史籍解題　（伝記篇）**　高梨光司　明治書院　昭10　342頁（㊢016.912；T）

4．**明治維新史研究の発展　—その研究史と文献解題—**　入交好脩　同文館　昭24　199頁（㊢910,7；I経研）

参考文献の解題，批評多く単行書の文献目録を付す。

5．**明治維新史研究講座　第6巻，別巻**　歴史学研究会　平凡社　昭39—40（㊞210.61；M2）

6巻：「明治維新史料文献目録 総索引」（286，87頁）天保期から明治憲法発布の期間を対象とし，昭和33年末までの文献を収録。

別巻：「座談会＝最近10年間における明治維新史研究の動向と問題点」（1～88頁）34年から43年までの文献目録「**増補明治維新史史料文献目録**」（89～229頁）を収録。

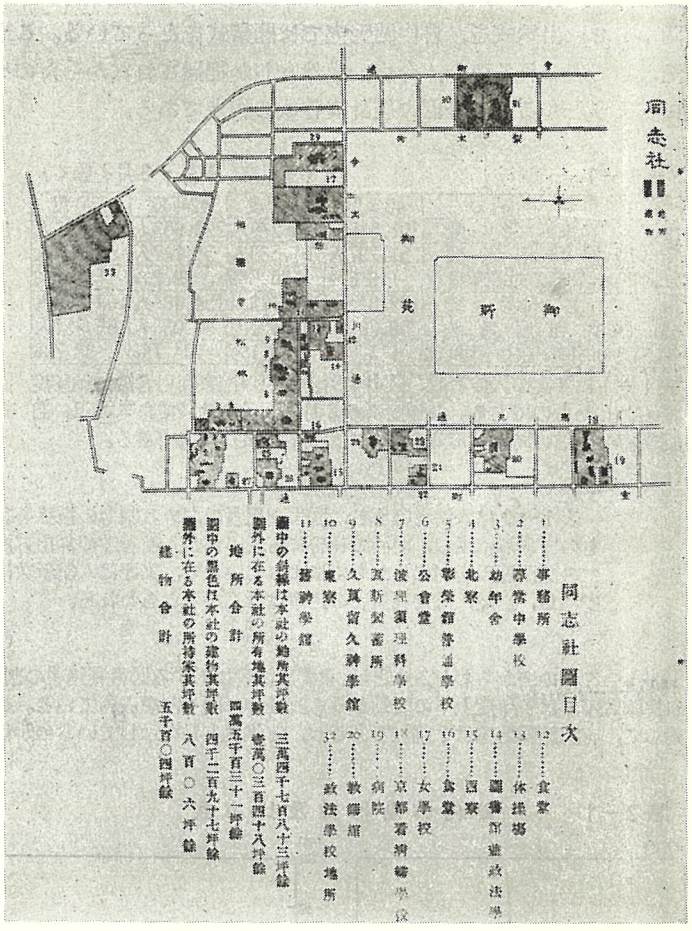
6．**幕末明治研究雑誌目次集覧**　柳生四郎・朝倉治彦　日本古書通信社　昭43　265頁（㊞027.5；Y）

幕末・明治の研究を目的とした雑誌18誌の細目を編集。

同志社大学図書館の歴史（その4）

19世紀から20世紀へ　—2—

明治33年，世界は新らしい世紀をむかえたのであるが，この明治30年代から明治40年代の凡そ10年間は前回にも述べた通り，同志社にとっては一つの“暗い谷間”の時代ともいえる荒天波瀾の時期であり，図書館について見るとき，一層，その感を深くするのである。すなわち“図書館”として建てられた建物（現在の有終館）も，その内部の部屋は殆んど各種の教室に転用されて，図書館の施設は僅かに数室を当てられていたにすぎなかった。図書館の所蔵図書もその増加に反比例して施設が縮少されたため，他の各建物，各学校に分置されざるを得なかったし，図書費を含む図書館備品費も年間500円そこそこという状態が続き，特に甚だしくは1904（明治37）年度の198円余という年もあって，それに応じて年間増加冊数も343冊（1906・明治39年）という状況であったのである。



しかしながら，このような衰退のなかにも校友・教職員の母校愛と篤志家の好意によって数多くの図書が寄せられ，当時の増加図書の殆んどはこれらの寄贈図書によるものであった。そして，そのなかには1901（明治34）年，校友の寄附金で贈入して図書館に寄贈された故同志社教授森田久万人博士の蔵書769冊からなる森田文庫をはじめとして，1907（明治40）年，はるばる太平洋を越えて贈られて来た新島襄先生の滞米中の旧友エフライム・フリント氏の遺蔵図書260冊からなるフリント文庫などがあり，また，帰米中の同志社教授ギュリック博士の斡旋尽力によって米国の多くの篤志家から寄せられた500冊余の図書も1908（明治41）年3月到着して神学校の蔵書に加えられ，これと同時に組合教会教役者会文庫数百部も図書館に委託されたのであった。そして，さらに同年，校友会の発起によって，校友の著作物を集めて校友文庫を設置することが決定されて，以来長い間，校友の著作物はその多くが著作者自身によって寄贈されることとなったのである。

以上のように図書館自身の退潮のなかにあっても校友・教職員さらには一般篤志家に至るまでの幅広い好意によって支えられたのであるが，同志社当局者も決して図書館の重要さを忘れていたわけではなく，「図書は学校の光にして其完備するは依って以て学校の生命を発達せしむる所以なり吾人は此大切なる機関の将来倍々発達せんことを希望に堪えず」（明治38年同志社年度報告）と述べているのであるが，現実には多事多難な当時の同志社にとっては，その充実発展は“希望”に止めざるを得なかったのである。しかし，明治も終りに近く，ようやく“暗い谷間”を抜けでて，再び活況のきざしが同志社全体に見えはじめ，図書館についても，単にその重要さを云々するだけではなしに「蓋し図書館の新設は我校の最大の急務なり」（大正元年同志社年度報告）と考え，日ならずしてその実現を目ざす姿勢が見えはじめ，ついで1914（大正3）年7月，待望の新図書館建設のことが決定され，その具体化が進められることとなったのである。

図書館一般利用統計（2）

前回には図書館の利用状況一般を報告した。

今回は，有隣館，自由閲覧室の利用状況がどのようになっているのか調べてみた。周知のとおり有隣館閲覧室では出納式を，自由閲覧室では開架式をとっている。こうした閲覧方式の違いがどのような利用状況として表われるのか，今迄，漠然としか把握されなかったのを，利用状況の変化の面から少しでも明確にしようとするのが今回の統計表作成の視点である。

Ⅰ　表1－1　　（各年度　8月・3月を除く）

		40年度	41年度	42年度	43年度
有隣館閲覧室	入館者数	301,519人	253,279人	229,653人	231,738人
	図書利用者数	51,297人	51,563人	51,147人	60,260人
	図書利用者の対前年度比	116.6%	100.5%	99.2%	117.8%
自由閲覧室	入館者数	152,345人	108,773人	154,486人	163,419人
	図書利用者数	59,269人	61,125人	64,036人	63,257人
	図書利用者の対前年度比	118.2%	103.1%	104.7%	98.7%

表1－1は年間の入館者数，図書利用者数及び図書利用者の対前年度比を表わしたものである。各年度より8月・3月を除いてあるのは，自由閲覧室の閉館の時期であるのと，開館時間の変更の為である。

表1－2　閲覧室別図書利用者比率表

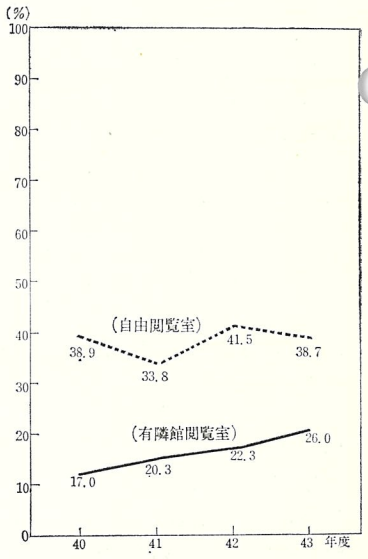
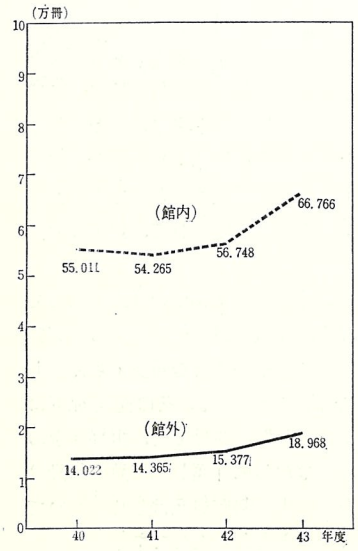


表1－2は入館者のうち，図書利用者の占める割合の推移を表わしたものである。但し，前回の報告にも述べたが入館者数の算出方法が，ドアの開閉度数を½にしたものによっている為，実際は入館者数はもっと多いし，当然，図書利用者の比率は低くなると思われる。

表1の二つの表からわかることは，まず入館者に対する図書利用者の割合は，自由閲覧室では各年度上下の変動がみられるが，約4割を占めている。これに対して，有隣館閲覧室は2割強であるが，各年度上昇を示しているのが目立↘↘つ。次に，図書利用者の対前年度比の推移をみると，40年度は両閲覧室とも大きく伸びている。ところが43年度をみると，自由閲覧室が減少しているのに対して，有隣館の比率は大きく伸びているし，利用者数そのものも自由閲覧室に迫っていることが注目される。

Ⅱ　表2－1　　館内外別冊数及比率表



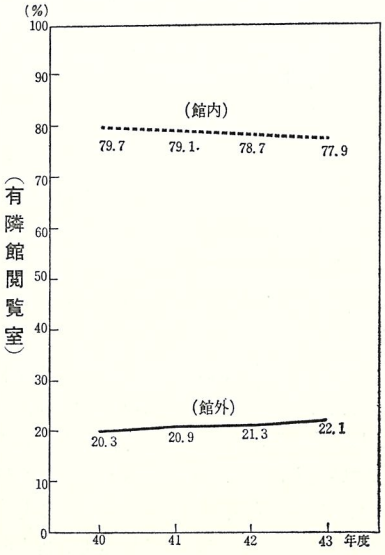


表2は，両閲覧室の貸出別の冊数と，その比率との推移を表わしてある。表2－3の学部文庫は，自由閲覧室の一隅に配置されてあるが，分類・収書の仕方が全く別になされているので別に表わした。

館内・館外の冊数の推移をみると，有隣館では館内・館外とも伸びている。自由閲覧室では横バイないし，43年度では低下を示している。比率では，有隣館では館外閲覧が毎年度上昇している。これに対して自由閲覧室は，逆に館内閲覧の比率が上昇してきている。学部文庫では，館外閲覧の比率が高いことは，収書の仕方が教員の推せ

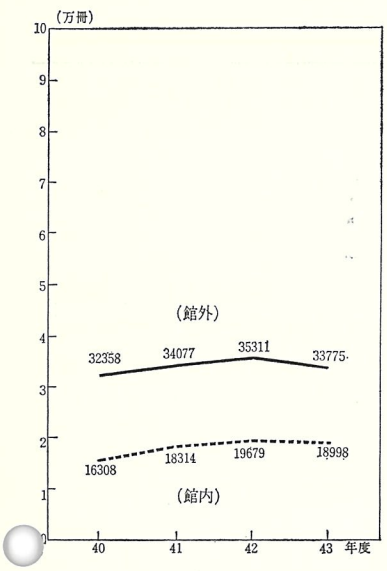
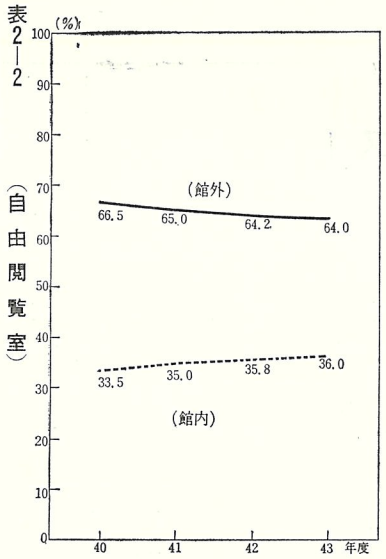


表2—2 (自由閲覧室)



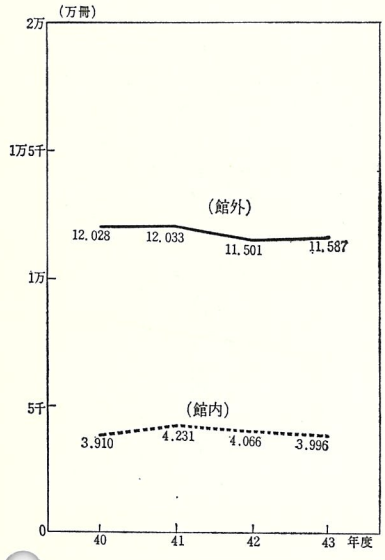
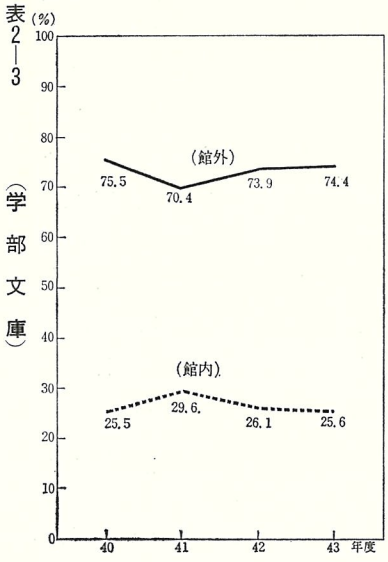
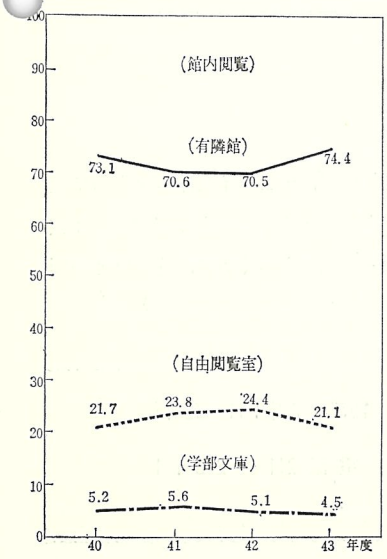
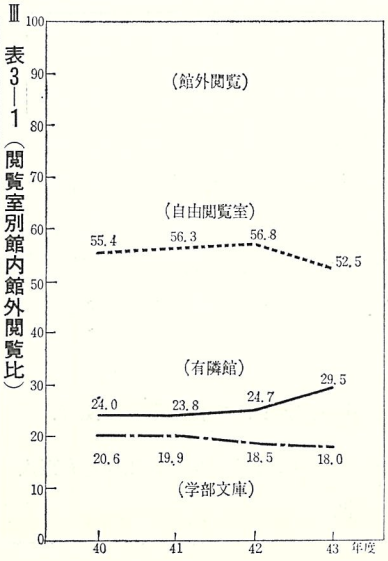


表2—3 (学部文庫)





Ⅲ 表3—1 (閲覧室別館内館外閲覧比)



ん図書であるのと，複本が多いことによっているものと考えられる。

表3—1は，表2で示した両閲覧室の利用冊数を館内・館外閲覧別に分け，各年度の比率を示したものである。

表3—2

	年度	40年度 冊数	40年度 対前年比	41年度 冊数	41年度 対前年比
館内閲覧	有隣館	55,011		54,265	98.6%
	自由	20,218		22,545	111.5
	計	75,229	114.0%	76,810	102.1
館外閲覧	有隣館	14,022		14,365	101.0
	自由	44,386		46,110	104.5
	計	58,408	111.7%	60,475	103.5

	年度	42年度 冊数	42年度 対前年比	43年度 冊数	43年度 対前年比
館内閲覧	有隣館	56,748	104.6%	66,766	117.7%
	自由	23,745	105.3	22,994	96.8
	計	80,493	104.8	89,760	109.0
館外閲覧	有隣館	15,377	107.0	18,968	123.4
	自由	46,812	101.5	45,362	96.9
	計	62,189	102.8	64,330	103.4

表3—2は，両閲覧室の館内・館外閲覧冊数の対前年度比を示したものである。表3—1の表から館内閲覧では，有隣館が毎年度約7割を占め，館外閲覧では，逆に自由閲覧室（学部文庫を含む）が7割強を示している。又，有隣館では館内・館外とも全体に占める割合が，42年度は伸びているのに対して，自由閲覧室では低下を示しているのがわかる。

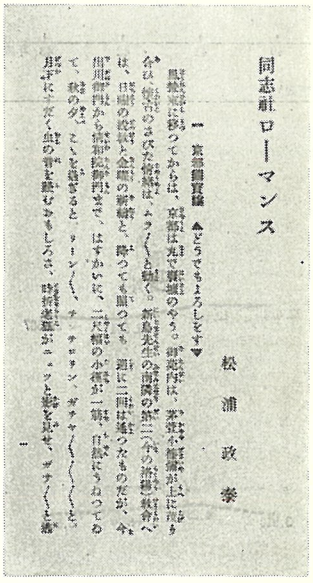
又，表3—2で示しているとおり，館内・館外閲覧それぞれの合計は毎年度上昇しているのに，自由閲覧室では館内・館外閲覧とも43年度は低下している。逆に有隣館閲覧室では，大きく増加していることが注目される。

以上の統計表から概略的であるが，有隣館閲覧室・自由閲覧室の利用状況の推移を分析してみると，有隣館では，図書利用者・図書利用冊数ともに順調に伸び，43年度のそれは大きく伸びていることがわかる。貸出別では，館内閲覧が主体であるが，館外閲覧も次第に伸びてきている。自由閲覧室では，前述とは全く逆の結果が生じている。図書館利用の全体としては，毎年度上昇しているにもかかわらず，こうした結果が生じている原因には，次のようなことが考えられる。まず，自由閲覧室そのもののスペース（書庫，座席数）が限界であることから，有隣館閲覧室へ利用者を移動させている。次に，有隣館閲覧室自体の各種のサービス（レファレンス，複写，etc）が大きく効果しているものと考えられる。

ピック・アップ

「同志社ローマンス」

「同志社ローマンス」 松浦政泰編著　東京　警世社書店　1918年10月25日発刊　定価１円20銭　本文410Ｐ　人物索引11Ｐ　図４枚　（「新婚間もなき新島襄先生御夫婦図」，「相国寺門前へ移転早々の同志社図」，「明治９年撮影のバイブルクラス（小崎弘道，海老名弾正，浮田和民等）図」「明治12年３月智恩院石段にて撮影の４年生図（大西祝，原田助等）」10×18.5㎝の小型本であり，包紙のデザインは半月，湯浅吉郎であった。（但し，本館所蔵のものには，残念ながらこの包紙は残っていない）。


同志社ローマンス

松浦政泰

本書の編著者，松浦政泰氏は，明治23年，同志社女学校の教頭として，当時，キリスト教主義学校が反動思潮の圧迫を受け，特に明治29年，同志社が米国伝道会社と絶縁して，既に廃校寸前に追込まれ，残った生徒と荒れ果てた家屋に転住して，一家と共に，学校に住み込み，遂に今日の盛業の学校にする迄頑張った，女学校の恩人である。

本書は自序にある通り，同志社の裏面史であり，特に同志社学生生活の赤裸々なエピソードの傑作集である。前に蘆花の「黒い目と茶色の目」が刊行されて，当時の同志社の暗黒面を天下に発表されたのに対し，その反対の光明面の描写を志したものである。それは，校友の談話の蒐集を主として編纂されてあり，その談話者も，一々明瞭に註記されている。後に「同志社五十年裏面史」昭和６年刊が発刊されて，同志社のかくれたる一面を紹介されたのであるが，この「同志社ローマンス」は，又それと違った面で，生の資料の提供，当時の雰囲気，真の同志社精神の渕源の推察への好材料等，同志社人ならずとも，一読，興味深々たるものあり，かの有名な小使さん，松本五平氏のこと等，五十年裏面史の同氏の記事と併せて，その風貌，面目躍如たるものあって，蓋し全巻好読物たるを疑わない。

あとがき

“びぶりおてか”第７号をここにお届けいたします。

文学部教授吉川哲太郎氏は，本年２月末日をもって，ご定年により，ご退職されましたが，デューイ文庫基金として大学図書館宛に金百万円也の指定寄附がありました。今後，恒久的に，この百万円の基金から生ずる果実を毎年デューイ文庫図書充実費宛に充当することとなりました。なお，基金の他に，教育学関係図書他一般図書をふくめて，約200冊の図書のご寄贈をうけております。ご芳志に対し，重ねて，厚く御礼申し上げます。

“びぶりおてか”　同志社大学図書館報　No. 7.　1970年７月１日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 211 — 2311

編集責任者　前川嘉門